

平成20年度

平和大使長崎派遣事業報告書



松 戸 市

目 次

平和大使長崎派遣事業にあたって	1
世界平和都市宣言	2
平和大使長崎派遣募集	3
平和大使名簿	5
平和大使長崎派遣行程	6
平和大使長崎派遣報告会	11
平和大使の報告	12
「長崎の空気」	熊 川 実 旺 13
「長崎へ行って学んだこと」	別 宮 賢 治 15
「語り継ぐべきこと」	渡 邊 ちさと 17
「長崎へ行って」	片 野 結 依 19
「長崎派遣を終えて」	清 水 のどか 21
「平和大使を体験して」	藤 井 彩 乃 23
「原爆」	清 水 健 人 25
「平和への思い」	神 部 莉 奈 27
「長崎平和大使として参加し学んだこと」	山 本 拓 実 29
「長崎平和大使を終えて」	黒 木 若 葉 31
平和大使長崎派遣事業を終えて	33
長崎平和宣言（平成 20 年 8 月 9 日	35

平和大使長崎派遣事業にあたって

松戸市は、昭和60年3月に「世界平和都市宣言」を行い、これまでさまざまな平和事業を実施して参りました。

戦後63年が経過し、戦前生まれの人口が全人口の約26%、約3,400万人、終戦当時15歳であった人は、約9%、約1,100万人となっている状況で、当時の様子を知る術が少なくなっていることにより、被爆体験や戦争体験の風化が懸念されるところです。

我々は、次の世代へこれらの経験を継承することが、今、課せられた使命であると認識しているところです。

併せて、世界平和都市宣言の理念である世界の恒久平和を念願するということから、若い人たちに世界各地で続く紛争に対しも、目を向けるような施策が重要であると考えております。

そこで、平成20年度平和事業の新規事業として「平和大使長崎派遣事業」を計画いたしました。

松戸市の次代を担う若い世代に、被爆地へ行くことにより、被爆の実相や平和の尊さを学習し、また、学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていけるようなことを期待して、事業を実施したいと考えております。

世界平和都市宣言

我が国は、世界で唯一の被爆国である。

何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。

しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。

かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和60年3月4日 松戸市

World Peace City Declaration

[英語]

Mach 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion.

This makes our nation determined that history will not be repeated.

All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.

However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.

In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.

We will endeavor to maintain nation wide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.

Therefore, we now declare our city as the "World Peace City".

City of Matsudo

世界和平都市宣言

[中国語]

日本是世界唯一的核弹受难国。

我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。

但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。面对动荡的世界、松戸市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、

高扬和平精神、为保障和平而尽力,坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

平和大使長崎派遣募集

世界平和都市宣言事業 第1回「平和大使長崎派遣」大使募集

<募集要項>



・松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集します。

<平和大使とは>

・「平和大使」とは、松戸市の世界平和都市宣言により、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて事前、派遣、事後研修を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていただくことが期待される人です。

<対象>

・市内中学校に在学する生徒で、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があり、事前、派遣、事後研修に参加できる人を対象とします。

<定員> 10名（応募者多数の場合は、抽選とします。）

引率：松戸市役所 総務企画本部 総務課職員 2名

<費用>

- ・市の負担 長崎への往復航空運賃、宿泊代、長崎での移動バス電車運賃、8/7の夕食、8/8、8/9の3食、8/10の朝食、昼食。
- ・自己負担 事前、事後研修の会場（市内）まで、松戸から羽田までの往復交通費、8/7の昼食など。

<申込方法>

- ・申込書に必要事項を記入して、任意の封筒に入れ学校に提出してください。

<提出期限>

- ・平成20年5月28日（水）

<研修日程(予定)>

1 事前研修

平和についてのオリエンテーションを行います。（自主学習）

6月14日（土）結団式及び第1回オリエンテーション

青少年ピースフォーラム等の内容説明。

7月上旬(予定) 第2回オリエンテーション

戦争、原爆、平和等について自主学習します。

8月上旬(予定) 第3回オリエンテーション

戦争、原爆、平和等について自主学習します。

2 派遣研修

(1)場所：長崎市

(2)期間：8月7日（木）～10日（日） 3泊4日

(3)内容：青少年ピースフォーラムへの参加等

青少年ピースフォーラムとは・・・8月9日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。

(4)「平和大使長崎派遣」日程表

8/7（木）	市役所→羽田空港→長崎空港→長崎市内ホテル（自主学習）	
8/8 （金）	午前	自主学習
	14：00～15：00	開会行事（被爆体験講話など）＜平和会館ホール＞
	15：10～17：00	参加型平和学習（被爆建造物等のフィールドワーク） 〈予定：原爆落下中心地碑、浦上天主堂ほか〉
8/9 （土）	午前	平和祈念式典への参列＜平和公園＞
	13：30～15：30	参加型平和学習（室内） ＜平和会館ホールまたは原爆資料館＞
8/10（日）	ホテル→長崎空港→羽田空港→市役所解散	

3 事後研修

研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、活動報告書の作成などを行います。

平和大使名簿

くま 熊	かわ 川	み 実	お 旺	(第四中学校	2 学年)
べっ 別	く 宮	けん 賢	じ 治	(第五中学校	2 学年)
わた 渡	なべ 邊	ちさと	(六実中学校	3 学年)	
かた 片	の 野	ゆ 結	い 依	(小金南中学校	1 学年)
し 清	みず 水	のどか	(古ヶ崎中学校	1 学年)	
ふじ 藤	い 井	あや 彩	の 乃	(新松戸南中学校	2 学年)
し 清	みず 水	けん 健	と 人	(金ヶ作中学校	1 学年)
かん 神	べ 部	り 莉	な 奈	(新松戸北中学校	2 学年)
やま 山	もと 本	たく 拓	み 実	(旭町中学校	3 学年)
くろ 黒	ぎ 木	わか 若	は 葉	(聖徳大学附属中学校	1 学年)



〈平和大使結団式〉

平和大使長崎派遣行程

8月7日（木）

◆ 11：00 長崎へ出発

11時松戸駅に集合して、保護者、校長先生、関係者に見送られ出発しました。

13時30分発スカイネットアジア航空37便で、羽田から長崎へ向かいました。

15時40分長崎空港着。バスでホテルへ向かいました。



〈羽田空港〉

◆ 19：00 千羽鶴作成（ホテル会議室）



〈千羽鶴作成中〉



〈千羽鶴完成〉

8月8日（金）

◆ 8：30 自主学習

ホテルから路面電車に乗り出島資料館へ向かいました。路面電車は、色々な車両があり、驚きました。しかし、電車は、大変混雑しています。

午前中は、出島資料館、新地中華街など散策しました。



〈出島資料館見学〉



〈出島資料館〉

◆ 13:00 原爆資料館到着

青少年ピースフォーラムに参加するために、会場へ向かう途中、昨日作成した千羽鶴を持参して「世界の平和を願って」原爆資料館へ献納しました。



〈千羽鶴献納〉



〈松戸市の千羽鶴〉

◆ 14:00 青少年ピースフォーラムに参加

平和会館ホールで、全国から31団体、256名が参加しての開会行事に続き、被爆体験講話を吉田勝二さん^{よしだかつじ}から話を聞きました。

この時は、まさかあの写真の方とは思いませんでした。

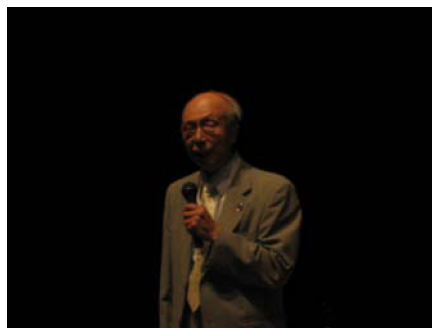
これからは、コースに分かれて参加型の学習が始まります。



〈ピースフォーラム会場〉



〈コース別学習〉



〈講話者 吉田勝二さん〉

◆ 15：10 フィールドワーク（平和公園コース）出発

長崎市青少年ピースボランティア（高校生・大学生など）の方が、原爆落下中心地碑や下の川、また、被爆当時の地層など当時の様子を親切に説明、案内してくれました。



〈ボランティアの方〉



〈原爆投下中心地付近〉



〈下の川を説明〉

◆ 17：00 自主学习

原爆資料館を見学。ここでも市民ボランティアの方が資料について、分かりやすく説明してくださいました。大使たちは真剣な面持ちで説明に聞き入っていました。

写真を発見！ 講話をしていただいた吉田さんの写真が展示されていました。驚きました。さっき、体験を聞いたばかりの吉田さんのお話がよみがえります。ここで改めて原爆の恐ろしさ、悲惨さを勉強しました。



〈実物大の原爆〉



〈原爆資料館内〉



〈原爆資料館内〉

原爆資料館に続いて、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館へ行きました。

ここは、なんともいえない厳粛な雰囲気の中で、名簿と遺影や手記を公開していました。

◆ 19：00 ミーティング（ホテルにて）

明日の日程の確認を行いました。

8月9日（土）

◆ 9：00 平和祈念式典参列（平和公園内）

8時30分原爆犠牲者慰霊平和祈念式典へ
参列するために、出発！路面電車で移動しました。

原爆犠牲者のご冥福、世界の恒久平和を祈りました。



〈平和祈念像〉



〈大使参列〉



〈参列の様子〉

式 次 第

- 10時40分 開式
原爆死没者名奉安
42分 式辞（長崎市議会議長）
46分 献水
48分 献花
11時02分 黙とう
03分 平和宣言（長崎市長）
13分 平和への誓い（被爆者代表）
18分 児童合唱
23分 来賓挨拶
33分 合唱
38分 閉式

◆ 13：30 ピースフォーラム参加

コース参加者80名を8班に分けて、それぞれの班で昨日フィールドワークで学んだことをふまえて、被爆の実相についてまとめを行うとともに、意見交換を通して、平和の尊さについて考えました。

また、身近な平和についても考えました。

全国から参加された方々と交流することができ貴重な体験をすることができました。

最後に、ピースフォーラム終了証書をいただきました。



〈名刺交換／自己紹介〉



〈各班のまとめ〉



〈身近な平和を考える〉

ピースフォーラムも終了して、自由時間です。長崎駅前へ行きました。

夕食を済ましてから夜のグラバー園を探索しました。夜景がとても綺麗でした。



〈発表〉

8月10日（日）

◆ 10：00 松戸へ出発

10時ホテルを出発。長崎空港へ向かいました。

12時発スカイネットアジア航空36便で羽田へ向かいました。

13時40分羽田空港着。バスで市役所へ向かいました。



〈長崎空港待合室〉

◆ 15：20 松戸市役所到着

3泊4日の日程で長崎へ行って参りました。みんな元気で帰ってくることができました。

初めての平和大使長崎派遣事業は、これで終了です。



〈長崎空港〉

平和大使長崎派遣報告会

8月12日（火）市民サロンにて

◆ 15：00 帰庁報告会

松戸市役所で、市長に長崎で体験してきたことを報告しました。



市の事業 平和大使

「原爆の恐ろしさ学んだ」

中学生7人が長崎から帰庁

松戸市の平和大使として、被爆地・長崎に派遣された中学生7人が12日、松戸市役所で「帰庁報告会」を開いた。生徒たちは川井敏久市長に「原爆の恐ろしさがよく分かりました」「戦争は二度と起きてほしくないです」などと感想を話し、平和の尊さをしっかりと学んできた様子だった。

同市の「平和大使長崎派遣事業」は今回が初開催。未来を担う中学生たちに平和な世界を築く心をほぐし、人でもらうのが担い。市内全中学校に平和大使の参加を告知し、七十一人の応募があった。その中から十人が抽選で選ばれ、今月七日から十日まで三泊四日のス

生徒らは現地では被爆体験者の講話を聞いたり、九日に行われた長崎平和祈念式典に参加するなど、核兵器廃絶を訴える集会「青少年ピースフォーラム」にも参加し、全国から集まった他の児童・生徒と交流を深める機会も得た。

帰庁報告会では、生

徒らが派遣時の様子を撮った写真をスライドに映して説明。原爆資料館の様子や長崎の中継街で撮影した記念写真などを紹介した。

川井市長が「自分の目で見て、耳で聞いた今回の経験を自分なりの感じ方で受け止めてください」と生徒らにあいさつした後、生徒らは一人ずつ市長に平和大使としての報告を行った。

松戸市立第五中二年の別宮賢治君（こは）は「人生のすべてを一回で奪ってしまう原爆の悲惨さを学びました。学校の先生たちから伝えていきたいです」と真剣な面持ち。

新松戸南中二年の藤井彩乃さん（は）は「被爆時の写真を見て、大きな建物がバラバラになって、レンガの破片が残っているのが、原爆資料館の中に入っただけで恐ろしかったです」と、今回の派遣事業で多くを学んだようだった。

川井敏久市長（中央）に平和大使の帰庁報告をする生徒ら

8月13日「千葉日報」より

8月15日「東京新聞」より

被爆の実態学び 尊い平和再認識

松戸市が長崎市に派遣し、活動報告をした、長崎の中学生の「平和大使」市の「青少年ピースフォーラム」が、市役所で川井敏久市長（左）に、松戸市役所事務

市長に派遣地・長崎の活動報告

松戸市が長崎市に派遣し、活動報告をした、長崎の中学生の「平和大使」市の「青少年ピースフォーラム」が、市役所で川井敏久市長（左）に、松戸市役所事務

薬の一環として今年初めて十人全派遣、原爆が投下された九日の平和祈念式典にも出席した。

中学生は市立第五中二年の別宮賢治さんや新松戸北中二年の神戸和菜さんら。自分の目で感銘した原爆の実態を語り、平和の大切さを再認識したという。ハ、九の日に開かれたピースフォーラムでは、全国各地の青少年と二泊三日の派遣体験を聞き、被爆した建造物を見学、意見交換もした。活動内容はプロジェクトで詳しく紹介する報告された。

中学生らは「資料館で被爆者の声が届いている写真を見ても、心が燃え上がった」「原爆はどい戦争は二度と起きてほしくないと思った。長崎で体験したことを多くの人に話したい」と感想を述べた。川井市長は、彼らの話を聞き、派遣してよかったと思うと、涙を流して「ご報告」と語り、

（川井敏久）

平 和 大 使 の 報 告

『長崎の空気』

第四中学校 2年 熊川 実旺

長崎に行き、街を歩いてまず始めに感じたことは、「松戸とは空気が何か違う」と、そう感じました。その「空気が違う」とは、「空気が澄んでいる」、「空気が汚い」というような汚れの違いではなく、戦争と平和にかける思いが松戸とちがって街の人、一人ひとりしっかり持っているというような感じの空気です。

具体的に違うところとはというと、人々の思い、そして景色です。まず、人々の思いとは、です。「8月9日」とは長崎に原爆が投下された日ですが松戸ではその日「原爆が落とされた日」なんという事は、テレビのニュースなどで報道されているのを見るくらいで、戦争のことをほとんど感じさせずに、風のふくままに1日が過ぎてしまいます。しかし、長崎だと、8月9日の前日、8月8日から、テレビ番組のほとんどが戦争と平和についての番組になります。このとき、私は「地域によって戦争と平和に入れる力の差がこんなに違うのか」と驚きました。そして8月9日になると街全体が「戦争以上に無残なことはない。今の平和をこれからも続けよう」という希望と反省の意に満ちていました。その空気の中で行われた「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」の中でも黙とうの1分間がとてつもなく長く感じました。たった1分という短い間で、その場にいる全ての人々の思いが一つになったという、とても不思議な気持ちだけが今でも忘れられません。

次に長崎の景色です。長崎というと鎖国時代唯一の文化のまどだった出島のような日本風のものから中華街、グラバー園のような西洋風のものまですべてそろっていました。また、そんな文化とは別に、戦争の跡も行く先ぎに残っていました。私は跡を見て、松戸と長崎の戦争と平和に対する気持ちの違いは景色にあるのかと

思いました。その理由は、長崎には平和にかんする公園や碑、戦争にかかわる記念館、石碑、博物館が多く有ります。だからそのような物が少ない松戸にくらべて長崎はいつでも戦争と平和を考えさせてくれるところだと感じたからです。

私は、「普段、教科書でしか学ぶことができない平和や戦争の悲惨さを実際に現地の人々の話を聞いて少しでも多くの人に平和の大切さを伝えたい」という理由でこの派遣事業に参加しました。しかし、長崎に行って、戦争当時の物を見て、実際に被爆者の話を聞いて、被爆した建物をさわっている間に、いままで自分で言っていた戦争の悲惨さや平和の尊さというのは、自分でもくわしく分からずに戦争、平和というものをいつもきれいな形におさめていただけではないかというように思えてきました。そして、私は、本当の戦争と本当の平和について、そして悲惨、尊いという言葉の奥の深さを知ることが出来ました。

少しでも多くの人々が私達、平和大使のような経験が出来るように、これからもずっと、この平和事業が続けられればいいと思っています。

『長崎へ行って学んだこと』

第五中学校 2年 別宮 賢治

僕は、この夏、松戸市の平和大使として8月8日、9日に長崎市で行われた青少年ピースフォーラム、平和祈念式典に出席してきました。

ピースフォーラムではたくさんの事を他の自治体の人と一緒に学びました。

一つ目は被爆者の方が被爆後とても苦しい思いをした事です。僕は今回のピースフォーラムで吉田勝二さんという方のお話を聞きました。吉田さんは、原爆落下中心地から850メートル離れたところで被爆し40数メートルも爆風で飛ばされたそうです。吉田さんは被爆したときの事をこう話していました。

「井戸のそばにいたが落下傘（パラシュート）が見え、ピカッと光った瞬間40数メートルも飛ばされた。皮膚は焼けただれ、肉が見えていた」というように話していました。そして吉田さんの皮膚はなかなか治らず、戦後もたくさんの人の視線をあびたり、挨拶をしたら小さな子に泣かれたりしたそうです。僕はこの話を聞いた時、啞然とし、こう思いました。（原爆は今まで普通に生きていた人の人生、命を奪い、投下されて63年たった今でもたくさんのひとを苦しめている事実を絶対に忘れてはいけない）と思いました。

二つ目は原爆の恐ろしさです。吉田さんの講話が終わった後、外へ出て原爆に関係のある場所を回りました。その時、僕はある一つのものを見てとても驚きました。その物とは浦上天主堂の一本の柱です。ただ一本の柱なので最初は別になんとも思いませんでしたが、ピースボランティアの方の説明を聞き、柱をよく見てみると、とても驚きました。天主堂の柱は爆風により一番下の土台より上の石、又、レンガは数センチもずれていました。これには驚き、僕は心の中でこう思いました。（何百

キログラムもあるような石とレンガの柱がずれ動くということは吉田さんのように人間が飛ばされてもおかしいことではないのだな) と思いました。

三つ目は長崎市にはまだ道の下に被爆者の骨が埋まっているかもしれないことを学びました。この説明は、水を求めて飛び込んでいった被爆者がたくさんいたという下の川で聞きました。その時の僕の気持ちは（本当にこの場所に立っていてもいいのか？被爆者の方々に失礼ではないのか？）というようなことを思いぞっとしました。又、下の川は現在も一部の場所で、被爆当時の石畳を使っているそうです。

四つ目は「身近なことから出来る平和」です。これは9日に他の自治体の中学生達と一緒に考えました。今、日本では戦争は起きては無いけれども、とても小さな事から考えると平和だとは言えない事も起きているのではないかという意味のテーマで皆と一緒に考えてみました。まず最初は個人で平和ではないと思ったことをふせんに書き、模造紙に貼り付けて、それぞれの分類に分けました。そこから、各班で分類したテーマで本題の「身近なことから出来る平和」について考えました。僕の班は「いじめ・差別問題」について考えました。その結果、皆が思っている「いじめ・差別問題」の解決法を寄せ書きのようにして模造紙に書いていきました。最後は自分が率先して出来て、一番良いと思う解決方法を班員そして他の班の人達に発表しました。

今回の「平和大使長崎派遣」で自分が実際に長崎市に行き、学んだことを少しずつ友達等たくさんの人に教えたいと考えています。そしてもう二度と核兵器が落とされないよう願い、自らも出来ることから行動していきたいと思っています。

『語り継ぐべきこと』

六実中学校 3年 渡邊 ちさと

驚き。私の頭の中にはこの二文字が常に頭から離れませんでした。

私は幸いにも機会に恵まれ、被爆地の長崎を訪れることが出来ました。その時は「百聞は一見にしかず」という言葉がいかに的を得ているか実感しました。

被爆当時の地層。これが私にとってはもの凄い衝撃でした。土にまみれたお茶碗、崩れてしまっている瓦……。私たちと同じように家族で食卓にならんでいる所を思わず想像してしまいました。原爆投下時刻は丁度お昼の時刻で、皆ふつうの生活を送っていた、とピースボランティアの方がおっしゃっていました。

私には想像がつきません。誰に想像できるでしょうか？日常と何もかわりなく過ごしていたのにもかかわらず、一瞬で全てを失う、家や家族、そして色彩までも失ってしまう。そしてその後も後遺症に苦しみ続ける……。考えつきません。私はこの地層だけでも驚きや憤り、悲しみを覚えました。

勿論目で見たものに驚きも覚えました。被爆者の吉田さんという方に聞いたお話はもっとすさまじく、現実的でした。聞いているだけでも痛みや叫びが伝わってくるかと思いました。今の日本とはあまりにも違いすぎて非現実に見える程でした。

吉田さんは最後にこの様なことをおっしゃっていました。「人の痛みが分かる心を持ってほしい」と。

原爆投下、という許しがたい惨劇がおこったのは人々の醜い、^{よこしま}邪な相手のことを考えられない心からおこった、そう思いました。原爆を開発した科学者たちは威力をおそれ中止するように頼んだのにもかかわらず、多額の研究費をかけていた事とソ連へ力をみせつけるための投下。人の痛みが分かる人間であったのならば、そ

んなことはしなかったのではないのでしょうか？それどころか戦争などおこらなかったのではないか、そう思ってしまいます。

今回、私は長崎に行ったことによって教科書では分からない大事なものを見てこられたような気がします。原爆の本当の悲惨さを知らずに育ち日常のありがたみもわからずに今を生きていたかもしれません。現に今の子供の大半は何も知らずに育っていると思います。

でも、そのままではまた同じ惨劇を繰り返してしまうと思います。未だに世界では核を保有し、実験を行っているような国もあります。そして原爆投下から63年という年月が経ち、被爆者たちも高齢になってしまっています。

悲劇は二度と繰り返してはいけない。そう願って思いたくもない様なあの日の出来事について話して下さる方の為にも、今度はこうして事実を見てきた私たちが少しでも多くの人々に語り継いでいかなくては、そう思いました。

『長崎へ行って』

小金南中学校 1年 片野 結依

「私はとても幸せなんだ。」私には、家族、命、友達、大切なもの、全て備わっている。何も不便な事もない。食べ物だっていくらでもある。爆弾が落ちてくる、心配もない。——これを「平和」というのだろうか。

私は平和というものを深く考えた事は、おそらくなかっただろう。でも、今回の青少年ピースフォーラムに参加し、原爆資料館、記念館へ行き、平和式典へ参列する機会を得て初めて、「平和」を考えた。私は多分今が幸せすぎて、「平和」というものに、気づけなかった、考えなかったのかもしれない。

私は、長崎で学んだことはたくさんあった。被爆者の方のお話を聞き、今でも原爆で、できた傷は治っておらず、今でも大変な思いをして、生きているんだなと思った。私が特に印象に残って、辛いなと思った事は、人が自分の顔を見てにげていたり、泣いてしまったりするとおっしゃっていたけれど、もし自分がそうだったらと考えると、心がズキズキと痛んだ。何も自分で顔を傷つけて、そうなった訳でもなく、本当に辛い思いをして生きてきたんだなと思った。

原爆資料館へも行き、私は初めて行ったけれど、展示室に入ったとたん、時計の音が鳴っていて、暗く重い雰囲気になって、正直少し恐かった。鉄塔がぐにゃりと曲がっていたり、爆風で何も跡形すらなくなっている街。まっ黒になっているお弁当、はしごに登っている途中の影、何もかもが一しゅん時間が止まったようにしかみえなかった。骨が見えてしまうくらいの大怪我の写真、丸こげになっている人。背中 of 皮はとれて血がにじみでている人。私は見ているのがとても辛かった。本当に、二度と落としてはいけない爆弾だと私はその時思った。原子爆弾というものは、

広島や長崎全てに、影響を及ぼすくらいの爆弾なんて、一体どんな大きさのものなんだろう、と思っていた。ほぼ実物大の原子爆弾の模型をみたけれど、そんなにすっごく大きくもなく、本当にこの爆弾が・・・と思ってしまった。本当に、にくい爆弾だと思った。人の体をとことん傷つけ、何年経っても、悪影響を及ぼす、最悪の爆弾だと私は思う。

私は、平和祈念式典に参列し、本当に、8月9日の11時2分。たくさんの命が一しゅんにしてなくなり、約60年も前だけれど、忘れてはいけない日だと思った。

日本は唯一原子爆弾を落とされた国だ。私達には、原爆の恐ろしさを伝えていく義務があると私は思う。けれども、戦争の時代に生きていた人が、今亡くなっている。だから私は一つでも多く戦争の悲惨さを知っておき、二度と戦争の悲げきを起こさない、起きないためにも、戦争、原子爆弾の恐ろしさを私達が、戦争で亡くなった人の死が無だにならないよう、平和の大切さを伝えていくことが一番大切だと思う。——忘れてはいけない。 あの日、8月9日を。

『長崎派遣を終えて』

古ヶ崎中学校 1年 清水 のどか

私は、初め戦争のことをあまり知っていませんでした。知っていたことは、小学生の時に習ったことぐらいでした。あんまり戦争に興味がなかったのですが、この派遣応募を見てもっと知ってみようと思い、応募しました。

1日目は、初めて飛行機を体験しました。長崎に着き、初めにびっくりしたものは、路面電車です。昔ながらなものがあり感激しました。

2日目は、青少年ピースフォーラムに参加しました。初めに被爆者の吉田さんのお話を聞きました。平和記念館に被爆当時の吉田さんの写真を見ましたが、ほんとうに生きているのだろうか？と思うほど、顔がとけていました。話している時の吉田さんは、ほぼ治っていました。吉田さんの話をきいていると、原爆の「爆風」「放射能」で死んでいく人がたくさんいたそうです。

そして、フィールドワークをしました。平和公園にボランティアの方と松戸市長崎派遣の人とで行きました。たくさん像がありました。

3日目は、平和式典に参列しました。全国の青少年、遺族、長崎の方、参列しに遠い地方からきた方々がたくさんいました。私たち松戸市平和大使は、その中のたった一つにすぎないのだと感じました。参列者の中には、福田首相や長崎市長なども参列していました。

中でも、一番印象に残ったのは、森重子さんの「平和への誓い」です。兄の被爆、父母の死。とても私には恐ろしくて仕方ありませんでした。

—午前11時2分—

それは、原子爆弾が長崎に投下された時の時間だそうです。

その投下された時刻、午前11時2分で止まっている時計を平和記念館で見つけました。わくは、砂をかぶり、とてもボロボロでした。それほど、原爆の威力がすごかったのだなぁと思いました。

原爆投下直後の地層が平和公園にありました。多分、私は一生忘れないと思います。地層の中には、ちゃわんなど私たちがふだん使う生活用品がたくさんちらばっていました。みんな今の私たちの様にふつうに生活していていきなり投下され、関係ない人々の命がたくさんうしなわれたなんてすごく悲惨です。

長崎市長や吉田さん、森重子さんもおっしゃっていましたが、やはり原爆、戦争はとても悲惨です。戦って戦って、目の前の敵をたおして。それで何が残るのか。それは、死体の山。そして後悔。勝っても負けてもいいこともないのです。家族や友達、大切な人が消えていく。こんな無駄な争いは二度とやってはいけない。私はそう思います。

現在、たくさんの国が原爆、原子爆弾を持っています。未だ、核実験を行っている所もあります。他の国々と戦争をする所、内乱をしている所。日本のあの戦争が終わり約63年。そんな現在でも他の国の戦争は終わりません。

私は、この長崎派遣を通して、戦争の悲惨さ、平和への尊さを改めて感じました。みんなが楽しく、そして安心できる。そんな世界に一刻もはやくなってほしいです。

私は、長崎で学んできたことをたくさんの人に広め、そしていかしていきたいです。

4日間と短い期間でしたが、すごく勉強になりました。またこういった活動に参加したいです。

『平和大使を体験して』

新松戸南中学校 2年 藤井 彩乃

私は、長崎に行って、いろいろな事がわかりました。

もし、長崎に行っていなかったら、教科書で学習する、何人亡くなって、戦費はいくらかかって、広島と長崎に原子爆弾が落とされて……。でも、長崎に行けたことで、教科書だけでは学べない、原子爆弾の恐ろしさや、原子爆弾により爆風や熱線はどうやって発生し、どれくらいの威力なのかと、現地に行かないとわからないことが、たくさん学べたので、すごく満足しています。

例えば、私の両親や友達に、「広島に落ちた原子爆弾と長崎に落ちた原子爆弾では、どちらが威力が強いでしょうか」と問題を出すと、広島と答える人が多かったです。なぜ広島だと思うのと聞くと、広島の方が、死者が多いからと言っていました。

このように、教科書に書いてあることだけで、判断していましたが、長崎に行き、学習したことで、長崎に落ちた原子爆弾の方が、威力が強いことがわかりました。

私が現地に行って印象に残ったことが二つありました。

一つは、吉田勝二さんのお話を聞いたことです。吉田さんは被爆者であり、当時顔の右半分が熱線により、真っ黒に焼けてしまい、外に出て、人に変な目で見られるのが、とても辛かったそうです。しかし吉田さんは、原子爆弾により、一緒にいた友達全員を失ってしまい、友達の分も長く生きないといけないんだと思い、今でも人前に出て、戦争の悲惨さについて語っています。私が吉田さんの話を聞いて、あんな辛い現実をよく乗り越え、元気で明るく話していたので、生きることの素晴らしさを改めて感じました。

もう一つは、原子爆弾落下地の隣にあった浦上天主堂の遺壁は、原子爆弾の爆風

により、浦上天主堂の土台と土台のレンガがずれていて、私はこんな簡単にレンガをずらしてしまうなんて、すごい威力のある爆風だなぁと思いました。また、熱線でレンガが黒くなっていたり、削れていたりと、とっても高い温度の熱線であることがわかりました。

原子爆弾のもう一つの恐ろしさは、原子爆弾に入っていた放射線です。目には見えない、当たっても何も感じないし、熱くも冷たくもないので、放射線を浴びると、最初は、脱毛や吐き気などするが、その後に、白血病やガンなどになり、一生被害者を苦しめるのです。

私はこんな悲惨なことがあったのに、被害者のみなさんは、元気に生きようとしていることが、とっても素晴らしいと思います。

私はこれから、二度と戦争が起こらないように、歴史など一生懸命勉強して、今までの戦争はなぜ起こったのかなど、いろいろ学習して、今後に生かしていきたいです。

私が長崎に行って一番感じたことは、「生きることは、とても素晴らしいこと」です。

『原爆』

金ヶ作中学校 1年 清水 健人

ここ長崎は昭和20年8月9日、原爆の落ちた地。今は静かな平和の泉の前に立ち、「のどがかわいてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水がほしくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました。」と刻まれた文字にショックを受けています。みなさんはあぶらの浮いた水を飲むことができますか。ほとんどの人が「いや」と言うでしょう。あぶらの浮いた水を飲むしかなかった人の気持ちは想像できないものと思います。

被爆した方のお話からも、原爆によって多くの人の未来がうばわれたということがすごく伝わってきてとても悲しかったです。話をしてくださった方も何度も顔の手術をして、今も薬をつけているそうです。ぼくは、原爆は人の体を痛めつけるだけでなく、心にも一生の傷を残していく恐ろしい兵器だと強く思いました。

多くの被爆した建物などを見て回るフィールドワークに参加した時に、原爆は四つの装置がついていて必ず地上500メートルにせまった所で爆発するようになっていたというのを知りました。高いところでは広はん囲に被害が及ぶように考えられていたのでしょうか。実際に爆心地で上を見上げこの上空で原爆が爆発したことで被爆した方の傷が重なり合いおそろしくなりました。

爆心地から10メートルとはなれていないところでも、かわらのへんや皿のかけらなどがうもれていて爆風の強さを物語る当時の地層がそのままの状態が残っていました。また、浦上天主堂の遺壁を見ると、土台と上の部分が爆風でずれ、半分が熱線により黒こげになっていたこともびっくりしました。

8月9日11時2分、会場に響く鐘の音。ぼくはじっと目を閉じて黙とうしてい

ます。原爆で亡くなった方々のめい福を祈るためです。ぼくの周りにも同じように平和祈念式典に参加し、重い表情を浮かべながら多くの人が並んでいます。前には平和祈念像が空と一体化するように座り、式典に参加しているぼくたちを見守っているようでした。像の空へ高く向けている右手は原爆を、水平にのばしている左手は平和を、うすく開けている目は亡くなった方々のめい福を示しているということです。この美しい長崎の街に63年前、原爆が落ち、一面焼野原になったなんて信じられないことです。一生に一度出れるか出れない式典に参加したことは自分にとって大きな価値があると思うし、とても感動しました。

同じ日、全国各地の平和大使と交流する機会がもてました。被爆地をコース別に見学してきたことの感想を話し合ったり、自分の身近な問題について相談しました。多くの平和大使の目で見えて考え合う中で自分の考えとは違う意見もあり『なるほど。そういう考えもあるな』と感心しましたし、学ぶべき点がたくさんありました。

長崎を訪れてぼくの心に深く刻まれたのは被爆者の方の一言でした。

「人を憎んではいけない。戦争を憎め。今、私達が泣いても嘆いても現状は変わらない。平和への心は人を労わる心だ。」

心にずっしりくるすばらしい言葉だと思いましたし、傷を受けながらもこういうことを言える人こそすばらしいと思いました。

今から何が自分にできるのでしょうか。長崎へ来て、見て、聞いて、考えて、思ったことはたくさんありますが、原爆はひどい、戦争が二度とおきてはいけない、人の命は尊い、本当に原爆や戦争は悲惨ということを言葉にして伝えるだけで良いのでしょうか。これから、ぼく自身が考える大きな課題です。

『平和への思い』

新松戸北中学校 2年 神部 莉奈

「被爆者の方から体験談を聞いて、戦争の悲惨さ、平和の尊さなどを知り、次の世代に何を伝えていって欲しいのか等を聞きたい。」

この思いを胸に私は平和大使長崎派遣にのぞんだ。私自身、小学校5年生の時から「将来プロデューサーになって、平和を伝える番組を制作したい」という思いがあったので、平和大使に選ばれた時から長崎に行くことに対して、本当にわくわくしていた。8月8日・9日に被爆者の方から直接お話を聞くことによって多くの人々の悲しみを心で感じ取ることができたような気がした。また、長崎に行く前より一層、平和の尊さなどを多くの人々に伝えていきたいという思いが強くなってきた。

たくさんの人々に出会いながら、多くのことを学んだ長崎での4日間。平和大使の仲間と初めて出会った時は、口から心臓が出そうなくらい緊張して不安でいっぱいだったが、何度も会ううちにお互いに打ち解けあっていった。

長崎でも、男子と女子、先輩と後輩は関係なく仲良くなれた。

2日目のピースフォーラムでは、この4日間のうち最も多くのことを学んだ。その中でも二つ、印象に残っていることがある。まず一つ目は被爆者、吉田勝二さんの言葉「平和の原点とは人の痛みがわかる心をもつこと」だ。人の痛みがわかる心をもつということは、平和に対してだけでなく、どんなことにも、通ずることだと思う。だから私も、この心を持ち、相手の気持ちを思いやることができるような人間になりたいと思った。二つ目は、平和公園内にある祈念像。右手が表している原爆の脅威、左手が表している世界平和。どちらの手からも、作った人の「世界が1分1秒でも早く平和になってほしい」という思いが強く伝わってきた。私にも平和

のために何か伝えることがあるなら、何か行動をおこしたい。以前よりも、ますます平和貢献に対する気持ちが高まってきた。

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館にある約7万もの追悼の『あかり』も大変印象に残った。最初、『あかり』の意味がわからず、何も感じなかったが、『あかり』がお亡くなりになられた方の数であることを知り、深く悲しみを覚えた。これから先、これ以上、原子爆弾による犠牲者が1人も増えないでほしいと思った。

3日目の式典中、1羽の蝶が会場内を行ったり来たりしながら飛んでいた。まるで、犠牲者の方が式典を見に来ているかのようなだった。また、その蝶は「ありがとう」と語っているかのようなだった。蝶は式典を撮影しているカメラにも止まったりした。とても不思議な気持ちになった。「平和を伝えていきたい」と口だけで言っているのではなく、必ず行動に移さなければいけないという思いが生まれた。

最後に、平和大使として長崎派遣の機会を私に与えてくださった松戸市に、又、この派遣準備に関わって下さったり、当日、引率して下さった総務課の方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。今回、学び、経験したことを生かし、将来の夢に向かって突き進んで行きたいと思っています。

『長崎平和大使として参加し学んだこと』

旭町中学校 3年 山本 拓実

今、平和な日本で僕たちが生きていられるのは、63年前の戦争で犠牲になった人達のおかげだと、ずっと思っていました。その中でも特に悲惨な出来事があった広島と長崎には、絶対に行きたいと思っていました。そしてこの戦争の悲惨さを知るために、今年の1月に広島の原爆ドームに行き、平和記念公園の資料を見て、想像以上の生々しい傷跡に衝撃を受けました。この戦争で犠牲になった長崎にも是非行きたいと思っていたところを、この度行くことができました。

最初、任命式の時にはすごく緊張し、まわりの平和大使の皆と仲良くやっていけるか心配でした。しかし第2回、第3回とオリエンテーションをやっていくうちに、徐々に皆とも打ち解け、長崎に行くときにはすっかり仲良くなり、とても安心しました。

長崎に行ってから2日目に、被爆者の吉田勝二さんの被爆して受けたヤケドのことや、そのヤケドのせいで周りの人から受けた差別の話を聞き、とてもショックを受けました。そして原爆資料館で吉田勝二さんの被爆して間もない頃の写真を見て、「なぜアメリカは人間がこんなになる爆弾を撃ったのだろう」と改めて強く思いました。

しかし、吉田勝二さんの「私は自分が経験した戦争や原爆の恐ろしさを話して、今の平和の大切さ、戦争の悲惨さを伝えていくことが、原爆で生き残った自分の使命だ」という言葉を聞いて、すごく感銘を受けたとともに、吉田勝二さんの被爆体験を次は僕たちが語り継いでいかなければならないと強く思いました。

吉田勝二さんの話を聞いた後、ピースフォーラムに参加して、長崎のボランティ

アの方と原爆中心地公園や平和公園を歩きながら、当時の状況などを説明していただき、その中で、とても印象に残ったのは「被爆当時の地層」でした。被爆者の遺骨が、まだ埋まっているかもしれないという話を聞き、長崎市内原爆で亡くなった人達の遺骨が、63年たった今でも、まだ埋まっているのはすごく衝撃的でした。ここで亡くなった人達は世界の平和を願っていると思います。しかし戦後、平和を願って中国が送ってくれた乙女の像に、日本人が赤いペンキをかけた、という話を聞いてすごく憤りを感じ「こんな人達がいるから戦争が起こるんだ」と思いました。浦上天主堂遺構の一部がずれているのを見て、東洋一とまでいわれていた浦上天主堂を壊すなんて原爆の威力がほんとにすごく、人々が一生懸命作り上げたものを一瞬で壊す悪魔の兵器だと思いました。それを、この先どんな事があろうとも絶対に使ってはいけないと思います。

3日目に被爆63周年原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加して、遺族席に座っている人達の多さに、「今でもまだ原爆の傷がいえないんだ、もうこれ以上戦争や原爆の被害者を増やしてはならない」と改めて思いました。

被爆63周年原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加の後、ピースフォーラムに参加して、全国の人達と、原爆のことだけでなく平和について話し合い、「平和とは何なのか、どうしたら平和になるのか」を考えさせられました。

僕は長崎市長のおっしゃった、「微力だけど無力じゃない」という言葉はとても心に響きました。今回の体験をこれからの人生において、どの様に活かせるか今の僕にはまだ分かりませんが、吉田勝二さんの話や、ボランティアの方々が教えて下さった事を胸に刻み、僕のように戦争の非道さ、平和の大切さを考える人達が増えれば、この世界で平和に暮らせる人達が増えると思います。

『長崎平和大使を終えて』

聖徳大学附属中学校 1年 黒木 若葉

昭和20年8月9日午前11時2分、この時間、平和な長崎に原子爆弾が投下されました。高度約9600メートルから投下された原子爆弾は、約500メートルの上空で爆発しました。この原子爆弾により当時約24万人の人が暮らしていましたが、そのうち約14万5千人の方の命が奪われました。

そして、この日から63年後の今年、私は、松戸市が主催した平和大使に選ばれ、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に、参加する事ができました。

私たちは、8月7日に松戸を出発して、その日のうちに長崎市内に到着し、次の日の8月8日に平和祈念式典にあわせて、みんな一緒に被爆の体験談や、平和の尊さを学ぶ青少年ピースフォーラムに参加しました。

最初は、当時高校2年生で爆心地より850メートルで被爆した吉田勝二さんの被爆体験講話がありました。この方は、その時の様子など多くのことを話してくれて悲慘な出来事だったことが分かりました。

私が、この平和大使に応募した理由の一つに友人のおばあちゃんが被爆者で、今でも月に一度は病院に通院し検査していてその理由を、よく知りたくて応募しました。この吉田さんも今でも治療を受けていることを聞き、多くの方が現在もつらい思いをしていることを痛感しました。

その後、私たちは各コースに別れて、長崎市内の被爆地や建物などを見て回りました。私は、平和公園コースで原爆落下中心地（原爆落下中心碑、浦上天主堂の遺跡）、平和公園（平和の泉、長崎の鐘、平和祈念像）などを見てまわりました。平和祈念像では、あのみんなが知っている有名な像の形は、天を指した右手は、原爆

のことを示し、水平に伸ばした左手は平和のことを示し、軽く閉じた目は、戦争で亡くなった方達への冥福を祈っていることをはじめて知り、深い意味や願いが込められているのだなと実感しました。そして、私が一番心に残っている事は、投下された後の土地の様子です。今でも、私たちがよく使っている茶わんのはへんなどがうもれていて、びっくりしました。

そして、次の日いよいよ平和祈念式典に参加しました。平和式典では、いまでも苦しんでいる多くの被爆者の方や、親などが被爆してしまい亡くなってしまったという方が参列していました。しかし、この参列していた被爆者のほとんどが高齢者の方々でした。私は、原爆の悲惨さを語りつぐ実際に体験したという方々が少なくなっているということをさびしく感じました。

今回私が、体験したことは、教科書には書いてなくて、実際に肌で感じなければ分からないということもたくさんあったので、今回この機会を与えられて良かったなと思いました。

以上簡単に、私が平和大使として経験したことを書きましたが、このほかにもみんなにも、伝えなければならない多くの思い出に残る体験をしました。

私は、今後この体験したことを松戸市の平和大使に任命された時に渡された平和大使任命証に書かれているとおり、平和な未来を築くため、戦争の悲惨さ、平和の尊さを更に学び、そのことを多くの人に伝えて、平和を願う気持ちを持ち続けていきたいと思いました。

そして、63年前の8月9日にあったことを決して忘れないと心にちかいました。

平和大使長崎派遣を終えて

総務課随行 小谷 和美

平成 20 年度新たな平和事業として、次代を担う中学生に平和な未来を築く心を育んでもらうため、原爆が投下された長崎市へ行き、自分の目で、耳で、足で、平和の大切さを感じ取ってもらう平和大使長崎派遣事業を実施しました。

大使の募集にあたっては、市内の中学校へ案内を行い、71 名の募集がありました。

その中から 10 名を選び、6 月 14 日に結団式を行い、事前研修として、3 回のオリエンテーションを行い、市の平和事業への参加など準備を行いました。

そして、8 月 7 日、原爆投下から 63 年目を迎える長崎に出発しました。

本来、接点のない 10 名、学校も学年も異なる子ども達が「平和」というキーワードで出会い、最初は、会話も少なかったですが、目的を共有することで、いつもと変わらない自分達になり、会話も弾み、自然と打ち解けていました。

長崎に無事着いた一行は、ホテルで、持ち寄った折鶴を千羽鶴にして、翌日、自分達の手で届けたいという思いがいよいよ実現することになりました。

8 月 8 日からは、青少年ピースフォーラムが開催されます。その途中、昨日作成した千羽鶴を原爆資料館へ献納して来ました。

午後から始まった青少年ピースフォーラムでは、被爆体験講話を熱心に聞き入っていました。また、長崎市のピースボランティアの方が被爆建造物などを親切に説明していただき、改めて長崎市の平和に対する強い思いが伝わって参りました。9 日は、平和公園で執り行われた原爆犠牲者慰霊平和祈念式典へ参列し、暑い中、大使達は、被爆して亡くなられた方のご冥福と平和の願いを込めた黙祷を行い、厳粛のうちに式典を終了しました。午後からは、全国から集まった中学生と平和について身近なことも含めて語り合い、交流を深めました。

3 泊 4 日の長崎派遣事業でしたが、大使に与えた影響は大変大きいと感じております。長崎から帰ってきて、顔つきは優しく、心も打ち解けて、自分で見てきたこと学んできたことを確り発言しています。2 ヶ月前では考えられませんでした。それほど子ども達は、敏感で、柔軟で、素直に受入れていることが伺えました。この派遣で得た貴重な体験は、いつまでも大使の心に残ってもらえると確信しております。

最後に、平和大使長崎派遣にあたりまして、ご協力をいただきました保護者の方をはじめ関係者の皆様、さらには長崎市のボランティアの皆様にご心よりお礼申し上げます。

6月に平和大使10名が決まり、オリエンテーション3回を経て8月7日出発の日を迎えました。大使10名も「平和について教科書で勉強するだけでなく実際に自分の目を見て勉強したい」「被爆者の生の声を聞いてみたい」といった様々な動機で申し込んだものの、初めは違う学校、違う学年で大使同士接するのもかなりぎこちなく、オリエンテーションの際にもなかなか自分の意見を言うことが出来ず、皆ばらばらの印象がありました。

大使だけでなく、私自身、中学生10名を連れて行くという随員としての役割も初めてで、事前準備として出来ることは全てやったという思いはあるもののやはり長崎に行くのも飛行機に乗るのも初めてという中学生を連れていくということに不安はありました。

1日目、皆でそれぞれが綴った鶴を持ち寄り、千羽鶴にまとめる作業をした頃からでしょうか。だんだんと生徒の性格が分かり、大使同士の会話もはずんで来たように思います。

2日目青少年ピースフォーラムでは、吉田さんの講話にじっと聞き入り、また、フィールドワークでピースボランティアに案内されているときには、質問に対してやりとりが出来る姿がありました。長崎の高校生が初々しく一生懸命大使に説明しようとし、それに懸命に受け答えしている姿が見られました。

自主学習で、原爆資料館に行ったときも市民ボランティアのお話に熱心に耳を傾けていました。説明は分かりやすく、詳細で生徒だけで館内を廻るよりも遥かに限られた時間の中で当時のことを勉強できたと思います。「私はボランティアになってまだ2年目です。長崎市では私を含めて130人以上のボランティアが活動をしています。」ととびっきりの笑顔で返して下さったのが忘れられません。

長崎市の「微力だけど無力じゃない」という思いをイベントのあちこちからボランティアさんとの交流を通じて感じ、平和と核廃絶に対する強い思いを被爆体験者だけでない若い世代からも受け取ってきました。

3日目の祈念式典では、9時に受付をしてから11時30分まで2時間半もの間、参列席にじっと座っているという松戸市からは比較にならない暑さの中、体調も崩さずに座っている姿を見て、嬉しくもあり、すごくたくましくも感じました。

この4日間の体験は、大使に忘れられない思い出として、忘れてはいけない思い出として、しっかりと受け継がれ、彼らに継承できたと感じております。

4日間の間に大使が、どんどん成長してゆく姿と表情に、「百聞は一見に如かず」ということを目のあたりにし、彼らの随員として立ち会えたことに感謝して終わりの言葉とさせていただきます。

長崎平和宣言

あの日、この空にたちのぼった原子雲を私たちは忘れません。

1945年8月9日午前11時2分、アメリカ軍機が投下した一発の原子爆弾が、巨大な火の玉となって長崎のまちをのみこみました。想像を絶する熱線と爆風、放射線。崩れ落ちる壮麗な天主堂。廃墟に転がる黒焦げの亡骸。無数のガラスの破片が突き刺さり、皮膚がたれさがった人々が群れをなし、原子野には死臭がたちこめました。

7万4千人の人々が息絶え、7万5千人が傷つき、かろうじて生き残った人々も貧困や差別に苦しみ、今なお[放射線による障害](#)に心もからだもおびやかされています。

今年は、長崎市最初の名誉市民、永井隆博士の生誕100周年にあたります。博士は長崎医科大学で被爆して重傷を負いながらも、医師として被災者の救護に奔走し、「原子病」に苦しみつつ「長崎の鐘」などの著書を通じて、原子爆弾の恐ろしさを広く伝えました。「戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけである」という博士の言葉は、時を超えて平和の尊さを世界に訴え、今も人類に警鐘を鳴らし続けています。

「[核兵器のない世界に向けて](#)」と題するアピールが、世界に反響を広げています。執筆者はアメリカの歴代大統領のもとで、核政策を推進してきた、キッシンジャー元国務長官、シュルツ元国務長官、ペリー元国防長官、ナン元上院軍事委員長の4人です。

4人は自国のアメリカに[包括的核実験禁止条約（CTBT）](#)の批准を促し、[核不拡散条約（NPT）再検討会議](#)で合意された約束を守るよう求め、すべての核保有国の指導者たちに、核兵器のない世界を共同の目的として、核兵器削減に集中して取り組むことを呼びかけています。

これらは被爆地から私たちが繰り返してきた訴えと重なります。

私たちはさらに強く核保有国に求めます。まず、アメリカがロシアとともに、核兵器廃絶の努力を率先して始めなければなりません。世界の核弾頭の95%を保有しているといわれる両国は、ヨーロッパへのミサイル防衛システムの導入などを巡って対立を深めるのではなく、核兵器の大幅な削減に着手すべきです。英国、フランス、中国も、核軍縮の責務を真摯に果たしていくべきです。

国連と国際社会には、北朝鮮、パキスタン、イスラエルの核兵器を放置せず、イランの核疑惑にも厳正な対処を求めます。また、アメリカとの原子力協力が懸念されるインドにも、NPT及びCTBTへの加盟を強く促すべきです。

我が国には、被爆国として核兵器廃絶のリーダーシップをとる使命と責務があります。日本政府は朝鮮半島の非核化のために、国際社会と協力して北朝鮮の核兵器の完全な廃棄を強く求めていくべきです。また、[日本国憲法の不戦と平和の理念](#)にもとづき、[非核三原則の法制化](#)を実現し、「[北東アジア非核兵器地帯](#)」創設を真剣に検討すべきです。

長崎では、高齢の被爆者が心とからだの痛みにあたえながら自らの体験を語り、若い世代は「微力だけど無力じゃない」を合言葉に、核兵器廃絶の署名を国連に届ける活動を続け、市民は平和案内人として被爆の跡地に立ち、その実相を伝えています。医療関係者は、生涯続く被爆者の健康問題に真摯に対応しています。来年、私たちは広島市と協力して、世界の2,300を超える都市が加盟している[平和市長会議](#)の総会を長崎で開催します。世界の都市と結束して、2010年のNPT再検討会議に向けて核兵器廃絶のアピール活動を展開していきます。国内の[非核宣言自治体](#)にも、長崎市が強く呼びかけて活動の輪を広げていきます。

核兵器の使用と戦争は、地球全体の環境をも破壊します。核兵器の廃絶なくして人類の未来はありません。世界のみなさん、若い世代やNGOのみなさん、核兵器に「NO!」の意志を明確に示そうではありませんか。

被爆から63年が流れ、被爆者は高齢化しています。日本政府には国内外の被爆者の実態に即した援護を急ぐよう重ねて要求します。

ここに原子爆弾で亡くなられた方々の御霊の平安を心から祈り、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くすことを宣言します。

2008年(平成20年)8月9日

長崎市長 田上 富久

【用語解説】

長崎平和宣言文下線部分解説

◆放射線による障害

原爆の放射線障害は急性障害と後障害に分けられます。急性障害は大量の放射線を浴びたときに出る症状で、嘔吐、下痢、発熱、皮下出血などを発症したのちに多くの人が死亡しました。

後障害は、被爆して数年から数十年してから現れる障害で、がんや白血病、白内障などがあります。

◆「核兵器のない世界に向けて」

2007年(平成19年)1月、「核兵器のない世界」と題した文章がウォール・ストリート・ジャーナル紙(アメリカの新聞)に発表されました。

執筆したのは、1980年代から90年代に、アメリカの大統領のもとで核政策を推進してきた、ヘンリー・キッシンジャー元国務長官、ジョージ・シュルツ元国務長官、ウィリアム・ペリー元国防長官、サム・ナン元上院軍事委員会委員長の4人です。

彼らは、「なによりも、核兵器を保有する国々の指導者たちが、核兵器のない世界を創造するという共同の目的に向けて、集中的に取り組む必要がある」として、アメリカをはじめとする核兵器の削減を強く呼びかけました。

アピールへの反響は大きく、ゴルバチョフ元ソ連大統領やベケット前イギリス外相など、世界各国の

元高官に賛同が広がりました。

2008 年（平成 20 年）1 月には、同じ 4 人の共同執筆で「核のない世界に向けて」と題された文章が再び同紙に発表され、賛同はさらに広がってきています。

◆包括的核実験禁止条約（CTBT）

核兵器を開発するために、これまで 2,000 回を超える核爆発実験が世界で繰り返されてきました。はじめは、空中や宇宙で行なわれていましたが、放射線や放射性物質を含んだチリが広い地域にばらまかれて、多くの人たちが被害にあいました。そこで、核爆発実験を地下だけに制限する「部分的核実験禁止条約」が 1963 年（昭和 38 年）にできました。しかし、核兵器をなくすためには、核実験を全てなくさなければならないということで 1996 年（平成 8 年）に国連で合意されたのが包括的核実験禁止条約です。この条約が効力を持つためには、核に関する技術を少しでも持つ 44 カ国の批准（国会での承認）が必要です。米国、中国、イラン、イスラエルは、批准しておらず、インド、パキスタン、北朝鮮はその前段階である署名さえしておらず、発効のめどは立っておりません。

◆核不拡散条約（NPT）再検討会議

(1) 核不拡散条約

核不拡散条約（NPT）は、核兵器保有国が増える（拡散する）ことを防ぐ目的で作られた条約で、1970 年（昭和 45 年）に発効されました。現在、2003 年（平成 15 年）1 月に一方的に脱退を表明した北朝鮮も含めると、国連加盟国の中での加盟国は 190 ケ国です。加盟していないのは、インド、パキスタン、イスラエルの 3 カ国です。

核兵器が拡散することを防ぐため、それまで保有していた米・ロ・英・仏・中の 5 カ国だけに核兵器を持つことを認め（核保有国）、それ以外の国が持つことを禁止しています（非核保有国）。

そのため、核保有国には、核兵器を減らすための交渉を誠実に行うことを求め（第 6 条）、非核保有国には核兵器の製造、取得を禁じています。

ただし、非核保有国には原子力の平和利用が認められています。非核保有国が原子力発電所を建設する場合は、必ずそれが平和利用であるかどうかを確認するために、国際原子力機関（IAEA）の検査を受ける義務があります。

しかし、イランは原子力の平和利用を名目に核兵器を開発している疑いをもたれており、問題となっています。また、核保有国の核兵器の削減も進んでいません。これ以上核兵器の保有国を増やさないためにも、この条約を各国が真剣に取り組むことが求められています。

(2) 再検討会議

核不拡散条約（NPT）の成果を定期的に検討するため、5 年毎に核不拡散条約再検討会議が開かれます。発効から 25 年後の 1995 年には、条約の延長を検討する「再検討・延長会議」が開かれ、無期限延長が決められました。

2000 年（平成 12 年）の核不拡散条約再検討会議では、核保有国による核軍縮への努力が不足しているとの声が高まり、「核兵器の全面廃絶に対する核兵器保有国の明確な約束」を盛り込んだ合意文

書が採択されました。

しかし、2005 年（平成 17 年）の再検討会議は、核保有国と非核保有国の意見が鋭く対立し、成果もなく閉幕しました。

核軍縮交渉の義務や、2000 年（平成 12 年）の核兵器廃絶への約束を守ろうとしない核保有国の姿勢に対し、国際的な批判が高まっています。

2020 年（平成 22 年）の再検討会議に向けての第 2 回準備委員会が今年 4 月、スイス・ジュネーブで開催され、実質的課題について議論が行なわれました。

◆日本国憲法の平和と不戦の理念

日本国憲法の前文には「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し」、また「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」とうたっています。

その決意を実現するため、第 9 条 1 項では、戦争の放棄をうたっています。日本国民の恒久平和の願いが憲法の不戦と平和の理念となっています。

◆非核三原則の法制化

日本が、核兵器を「持たない」「つぐらない」「持ち込ませない」という 3 つの原則のことで、1967 年（昭和 42 年）12 月、当時の佐藤栄作首相が国会（衆議院の予算委員会）で発言しました。1971 年（昭和 46 年）11 月の衆議院で沖縄返還に関連して、初めて国の方針（国是）として決議（国会の意志を決めること）が行われました。核不拡散条約を批准（承認）した時や、国連軍縮特別総会が開催された時などにも決議を繰り返しています。

しかしながら、政府は、この非核三原則は国の方針となっているので、法律に定める必要はないという立場をとっています。

長崎市は、平和宣言などの機会を通じて、法制化を国に働きかけています。

◆北東アジア非核兵器地帯構想

北東アジア非核兵器地帯とは、日本と韓国と北朝鮮の 3 か国を「非核兵器地帯」にしようとするものです。条約として成立するためには、3 か国に核兵器がないこと、核保有国（中国、ロシア、米国）が 3 か国に核攻撃をしないと約束することが必要になります。

このほか、核兵器を禁止する地域の範囲や、核兵器を持っている中国、ロシア、米国との関係によって数種類の非核兵器地帯案が出されています。

日本では、1971 年（昭和 46 年）に「非核三原則」の国会決議が行なわれ、また、韓国と北朝鮮による、「朝鮮半島非核化共同宣言」が、1992 年（平成 4 年）に発効するなど、それぞれの国が非核化を表明しています。

しかし、2006 年（平成 18 年）10 月、北朝鮮が核実験を実施し、北東アジアの平和と安全が大きく脅かされました。2003 年（平成 15 年）から始まった「6 か国協議」（日本、米国、中国、韓国、ロシア及び北朝鮮）では、それらの問題解決に向けての交渉が進められています。

◆平和市長会議

1982 年（昭和 57 年）6 月、国連本部で開催された第 2 回国連軍縮特別総会で、広島市と長崎市は、世界の都市が国境を越えて連帯し、共に核兵器廃絶への道を切りひらくために「核兵器廃絶に向けた都市連帯推進計画」を提唱し、この計画に賛同する都市により「世界平和連帯都市市長会議」（後に「平和市長会議」に改名）が創設されました。

現在、加盟都市数は 130 カ国・地域、2,317 都市です（H20.6.30 現在）。2009 年（平成 21 年）8 月には第 7 回平和市長会議総会（4 年に 1 回開催）を長崎市で開催する予定です。会長は広島市長、副会長は長崎市長他 9 都市が務めています。

◆非核宣言自治体

非核宣言自治体とは平和を願い、核兵器の廃絶などを求める宣言を行なっている日本全国の自治体（都道府県や市区町村）のことです。全国 1,800 以上ある自治体のうち、1,400 を超える自治体が宣言を行っています。非核宣言自治体のうち、核兵器廃絶を目指して、お互いに協力して活動をしようとするのが、日本非核宣言自治体協議会で長崎市長が会長を務めています。平成 20 年 7 月 1 日現在、243 の自治体が協議会に加入しています。松戸市は、平成元年に加入しています。

日本非核宣言自治体協議会では、核実験に対して抗議活動を行ったり、日本全国で原爆に関する情報の発信などを行っています。



平成 20 年度
平和大使長崎派遣事業報告書
～世界の平和を願って～

松戸市
総務企画本部総務課

平成 20 年 1 0 月発行